

俺の平和はどこへや
ら・・・

こりゅー君

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気が付いたら何もない、無の世界。これなんてテンプレ？そう思っていると、目の前に球体が。球体によると転生させてやるとのこと。これはなんてご都合主義だろうと思ひ。テンションが上がる中で告げられたのが、白い魔王のいるリリカルでマジカルな世界に転生させるだ?!原作加入しがんばりつつ、負けない程度・・・?の特典をもらい、いざ魔法の世界へ!と思った。だが、そこで主人公が目にしたものとは・・・。

目次

第1章く中学生って大変な時期く

新たな人生第1歩 1

やっと着いたか・・・あれ？ここどこ？

6

俺絶望を知りました！ 16

中学校は怖いところ 24

学校始まって1日で体力測定ってどん

な学校だよ 34

あー死亡フラグだなー 44

やっと僕のターンですか・・・

50

やっと僕のターンって終わりかよ！

58

これで勝ちだ！マ○ク！あれまだなの

か!?

66

第1章 中学生つて大変な時期

新たな人生第1歩

目が覚めたら、真っ白……いや何も無い無の場所だった。俺は何をしていたんだろ？と考える悩んでいると、目の前に野球ボールくらいの球体が浮かんでいた。俺はその球体を掴み、そして……投げた。ボールは勢いよく飛んで行った。その後、俺の後頭部に衝撃が走る。

「おい、こらなにいきなり投げてんだ？」

突然俺の後頭部に走った痛みとともに、声が聞こえてきた。俺は驚き後ろを振り向くと、そこには先ほどの野球ボール（仮）が浮かんでいた。

「誰が野球ボール（仮）だ。俺はこれでも神なんだぞ？」

……この球体、いや野球ボール（仮）は何を言っているのだろうか。その容姿で神ですと？そんなどこかの顔をすぐ近付ける超能力者じゃあるまいし……。

「たく……何なんだよ。ここに来るやつときたらどいつもこいつも文句ばかり言いやがって……ここで転生がとか「転生だつて!？」ほら見る転生と言った瞬間顔色変えやがって……」

なんとここは世にも珍しい転生の間だそうだ！（勘）そうかそうかこの球体・・・いや球体さんは神様なのか。ということはまさかの転生フラグ!?

「ああ・・・その通りだ。全くゼウス神め・・・余計な死人ばかり出しやがって、転生させる俺の身にもなれって・・・」

突然文句を言いだす球体様。これは流れるにも、俺転生じゃね？あれだろ？間違えて殺しちゃった！テへって奴だろ？もうそれなら転生万歳！

「しかも来るやつどいつもこいつも、転生つてのを理解しているのが気に食わねーな。まあ良いだろう。俺の仕事も今日まで出しな・・・さつさと特典付けて送ってやるよ」

見ろ！見ろ！転生フラグだ。しかも特典くれるつてよ？やったね！

「特典は3つだ。時間制限とかはないがさつさと決める。個人的に俺がめんどくさい」

球体様のおっしゃる事には、3つの特典をくれるそうだ。しかも個人的にめんどくさいから早く決めろつて・・・てか、いまさらだが俺しゃべってないのに何で伝わってんだ？

「あーお前の心の声？なんて丸聞こえ何だぞ？そんなこと、どうでもいいからさつさと特典決めて逝けよ？原作ブレイクでも、何でもしていいからさ？容姿はこつちで決めてやるし、転生先はリリカルなのはだし、さつさと決めるよ？」

・・・なんかさらつといろいろ言ってるんだが!?!リリカルな世界か・・・これは特典

考えなくてはな……。

〈数時間後〉

「おい……いい加減にしてくれないか？いつまで待たせるんだ？」

「まて！もう決まったから！」

「それ何度目だよ……何回繰り返せば気が済むんだよ……」

「本当だって！よ、よし。決まった！決まったからな！まず1つ目はドラクエの魔法を使えるようにしてくれ。これの魔力量は某魔王様の如く、メラがフェニックスになるくらいで。」

「やつと決まったか。それくらいなら問題ないぞ。よし次は何だ？」

「次は俺に魔術を使う才能をくれ！」

「ふむ。そんなものでいいのか？……よし良いぞ最後は何だ」

「最後は固有結界 無限の剣製だ。」

「ほうほう、そこで定番の特典だな。ん？待てよ……そうか、そういうことか。なるほどな……それで魔術を使う才能か。これなら固有結界を使うことはできるからな。」

「そういうことですぜ？よくある話だと、無限の剣製選んだけど、魔術回路がないので使えないことがあったりするが。魔術を使う才能があれば……あれ？これ魔術回路やっぱりいるんじゃないか？ま、まあダイジョウブなはずだ！」

「仕方がないな……特別だぞ？魔術の才能だけで固有結界使えるようにしといてやろう」
おお……なんて太っ腹な球体様だ……まるで神様のようだ！

「いや神様なんだけどな？……さてと、特典も選り終わったことだし、そろそろ逝けよ？」

球体様がそう言い放った瞬間突然眠気が襲いかかってきた。

「ああ言い忘れてたがお前の転生先には転生者が2人先にいるからな？まあがんばれよ？」

そういうことは先に言っただけでよかったな……後ここは落とす穴のテンプレルート守ろうぜ？

そう言い残し、男の体は光の粒子となって消えていった。

「ふう……やっと行ったか？全く面倒なやつだぜ」

球体が一息つき、球体状から人型へと変わる。

「やっぱこの体系が一番楽でいいな」

固まった背筋を伸ばし、骨を鳴らす。

「ゼウス様ここにいらっしやったのですか？」

後ろを振り向くと、そこには部下が1人、書類の束を持ち、後ろにたたずんでいた。

「くそ。また仕事か・・・せっかくの暇つぶしが、まあこれで後300年はまた働けそうだな？」

いやらしい笑みを浮かべ、部下とともに部屋を後にする。

「がんばれよ・・・？俺の暇つぶし第365241950番目よ？」

そう言うとはほど待っていたであろう部屋には無数の名前が映し出されていった。その中の点滅している所に書かれていたのは・・・

第365241950番目 桐谷翔と。

やつと着いたか・・・あれ?こどこ?

まぶしい・・・。まず思ったことだ。

俺はなにをしていたんだ?と疑問に思い徐々に意識が覚醒していく。そして眼をゆっくりと開ける。そこには森があった。

「森・・・?なんでだ?俺は確か・・・!!転生したんだったー!キャツホーと言うことはここはリリカルでマジカルで砲撃キャツホーの世界!」

そう思うと、だんだんとテンションが上がってきた。

「と言うことは早速ここがどこだか把握しつつ、無印なのかAsなのかストライカーなのか確認せねば!」

思った事をすぐするのが俺です(キリ)。なんて思い森から出ようと、腰を上げ、立ち上がる。

「あれ?目線が低いな・・・これはまさか・・・!転生でよくある、転生したから歳が若返ったというあれか!」

ちなみに桐谷翔は前世では23歳。いい年してアニメが好きだった。オタクやひつきー(引き籠り) or 自宅警備隊ではなく、会社では評判がよく運動もできるアニメ好

きだったのだ。

身長が低くなった事に、いや若返った事に喜びつつ、森の出口を目指す。少し歩きあ
る事に気がつく。そうソレは・・・

「俺ってドラクエの魔法と、固有結界使えるんだろうか？」

歩きながらでもできそうなドラクエの魔法から発動してみる。まずは定番・・・なの
か？これだ！

「メラー！」

MPが足りないようだ。

「・・・え？MPが足りないだって？まっさかー！よし、もういつちよだー！」

今度こそは！と思い、息を吸い込み。ちよつとだけ力を入れ、そしてより正確に発動
するためにイメージもしつつ、もう一度唱える。

「メラー！」

MPが全く足りないようだ。

orz これが今の俺の心情である。だが、少し納得した事もある。何かって？それ
はな・・・

「俺・・・魔術が使えても魔力ないじゃん・・・」

おわかりいただけるだろうか？一部の人は魔術≡魔力が使えるという式が出来上が

るかもしれない。いや間違えではないと思う。だが考えてみよう。俺の頼んだ願いを。

ドラクエの魔法を使えるようにしてくれ!使う魔法の魔力量を某魔王様の様にと:俺の馬鹿!馬鹿野郎!よくよく考えてみるよ!例を上げるとするぞ?まずだな、普通のドラクエの魔法使いがメラを使うとするだろ?これに必要な魔力量は5としよう。だがな魔王様を使うメラはなフェニックスになるんだぞ?漫画では使い方で変わるとは言っていた。だがソレはそもそも魔王様の魔力量が多いからであって、実際魔王様の使ってるメラに必要な魔力量は単純に言ったら500近くに上がるわけだ。これで威力がメラゾーマ並だから問題はない。だから必要魔力量の減少ができて初めて、俺でも使えるようになるわけだ。・・・うん何言ってるかわかんね。まあ要するにMP5もないmobじゃフェニックスはおろか、スズメにすらなれないってこった。

「これは魔力量を増やす必要がありそうだな・・・」

独り言をつぶやいていると、後ろにあつた茂みが突然揺れた。何だ!と思ひ、後ろを振り返って俺は言葉を失った。何故かって?それはな・・・

「なんだ騒がしいな・・・誰に断って我の領域に入っておる?」

頭に角を生やし髪は長く、顎鬚も長く、身長も大きく、そして何よりもこの威圧感:間違いねえ!(いや、威圧感は適当だぞ?)そこにいたのは年老いた、大魔王バーンであつた。

「どうした？なぜ黙っておる？はよ理由を言え？我が消してくれるわ」
「つて、消す前提かよ！いや、違う違う。」

考えろ！考えろ俺！なんでこんなところに魔王様いるんだよ！リリカルでマジカルな白の魔王のいる世界じゃなかったのか!? どう見ても黒の魔王じゃねーか！しかもモノホンの魔王だし！ど、どうしよう！

「おそいのー、仕方がない消しっ」ちよつとまったー！」ん？理由を話す気になったのか？言ってみろ？

「お、俺はま、魔王様の仲間になりたいんだぜえー？」

「ほお・・・私の仲間になりたいと・・・？面白い奴だ。良いだろう、仲間にしてやろう。だが私の機嫌を損ねた場合はお主には消えてもらうぞ？」

なんとか魔王にいい訳をし、奇跡的に、いやなぜか仲間になれた。ここから俺のドラクエライフが始まるんだ！・・・完！

・・・つて終わってねーよ！ドラクエライフが始まるんだ！じゃねーよ！これリリカル！リリカルなの！と言うわけでここから日記風に桐谷翔のドラクエライフをお楽しみください。

2月13日 晴れ

気がついたら、森でした。リリカルで活躍キャツホー!と思つて魔法を使つてみました。

魔法できなつた(涙)

少し歩いていると、魔王が現れた!

いい訳をし、仲間にしてもらった。俺どうなるんだろう・・・

2月14日 晴れ

魔王様の魔法ルーラにより、城に直行!部屋を与えてもらい、寝て、起きた。

御飯はパンとチーズだった。なかなか美味であった。

魔王様に会うべく城の廊下に出ると、大きな鰐がいた。俺を見て少し驚いていたようだが、妙に納得した様子で、その場を去つて行った。

魔王様のいる場所に行く。率直に魔法の練習がしたいと言つたら。訓練所?を貸してくれた。

2月20日 曇り

練習を始めて6日。成果は残念ながらない。あるとすれば城にいる魔物とは仲良くなつた。よくよだれを垂らしながら追いかけてくれる。いつもはらはらどき

どきである。

練習をしていると、顔までローブをかぶった暗い人が声をかけてきた。暗黒闘気を習わないか？と勧められたが、魔法が使いたいと言うと。なにか液体を飲まされた。そこから1日記憶がない。

2月29日 晴れ

何故か魔力量が上がっていた。後で聞いた名前はミスト。親しげにミストさんと呼んでいる。

どうやら飲まされたのは魔王様の血のようで、中級魔法までなら使えるようになって。やったね！最近では、追いかけてこする魔物達を練習台に、魔法を撃っている。ミストさん曰くセンスは良いそうだ。目指せ！時期魔王！

3月4日 曇り

何やら最近城が騒がしい、また勇者が現れたらしい。でも、その報告を聞いたおじさんがペットのドラゴン達を引き連れて、討伐に行った。数時間もしないうちに、丸い焦げた物体が魔王様の前に転がっていた。魔王様は少し見ると、メラと言つてフェニックスを出し、灰さへも消し飛ばした。魔王様さすがです！

4月7日 雨

魔王様のフェニックスメラの練習をしてもう1カ月たった頃、ミストさんが青年を連

れてきた。青年は暗黒闘気を使って俺に練習をつけてくれるそうだ。やだな・・・

練習をしていると、ややテンションの高い半身フレイム、半身ブリザードが来て、青年を挑発していた。その時に使っていた、フィンガー・フレア・ボムズという、メラゾーマを5本の指で撃つという技をまねることにした。

4月20日 晴れ

訓練をして、上級魔法が使えるようになった。恐ろしい成長だと、ミストさんが驚いていた。

青年のお陰で体術も身に着きつつ、最近ではクロコダイルさんも一緒に訓練をしている。

たまに、外からおじさんがこっちを見ているがなんだろう？

く3年後く

6月19日 晴れ

あれから三年たった・・・日記の存在を忘れるほど練習していたんだよ？嘘じゃないよ？決して三日坊主じゃないよ？まあ三日以上書いたしいいか！

と、言うわけで3年間でメラをフェニックスに、ヒヤドをフェニックスに、バギをフェニックスに、ギラをドラゴンに、デインをドラゴンに、イオをフェニックスに、できるようになった。ちなみに上級の上、ここでは超上級と言おう！まあ要するにメラガイ

アーだ。

それと、補助魔法から、回復魔法までできるようになった。

途中でおじさんに教えてもらいつつ竜闘気砲呪文（ドルオーラ）の練習をし、使えるようになったのは感動である、

3年で魔王様は何故か弱ってきた。どうしたんだろう？

8月20日 雨

ひどく雨の強い夜。頭に声が響いて来た。どうやらあの神らしい。送る世界は間違えたんじゃないかと、俺のためにいったん魔法を使えるようにしてやろうとのこと。良いやつじゃないか・・・

そろそろ、リリカルの世界に行けるらしい。

それと、魔王様がなくなった。

今朝起きて、いつも通り魔王様にあいさつをして、訓練に行こうとしたら、城が騒がしい。何が起きたのかと思ひ、ミストさんに聞くと、魔王様が病気になるかと。俺が治せないか聞いたところ、魔界の竜の呪いだそうで、もう長くはないらしい。

魔王様の寝室に行くと、魔王軍の隊長達が集まっており、魔王様の近くにいた。

俺が近くに行くと、魔王様は少し微笑み、俺の頭をなでた。すると、魔力量が突然膨れ上がる感じがし、魔王様に目を向けるとすでに亡くなっていた。

8月21日 晴れ

今日は快晴だ。俺はもう少ししたらこの世界を去る。ミストさんにそう告げると、もう分かっていたらしい。

どうして知っているのか聞くと、魔王様がそう言っていたらしい。さすがです。

目から流れる汗を拭き、ミストさんにお別れを告げる。時期魔王はミストさんだそう
だ。

他の皆には黙って去ろうとした時、皆の声が聞こえた。皆に見送られ、俺は無事に旅
立てた。

魔王様僕を拾ってくれて、仲間にしてくれてありがとう。

昔いた、おかしな少年の日記を閉じミストは少し、微笑む。

あの少年はどうしているのだろうか、こんな私と仲良くしてくれたあの少年は元気で
いるのだろうか。あれから100年近くたってあの頃が鮮明に思い出せるのはあ
の少年のお陰だと思う。あの短期間でこれほどまでの感情を残してくれたのは少年が
初めてであった。少年の名前は最後まで聞かなかった。今になって、名前を聞いていれ
ばよかつたと思つたが、それも昔の話。そう思い閉じた日記に目を落とす。するとそこ

には魔族後で・・・

魔王軍の家族　そして、ミストさんの弟子　桐谷　翔

と書いてあった。その文字を読み、ミストはまた少し微笑み、聞こえるかわからないような、消えそうな声でこう言った。

「ありがとう翔よ・・・」

俺絶望を知りました!

転生した。俺の時代が始まる。そう思ってた時もありました。だがしかし、俺が想像していたものと違った。最初はドラクエの世界に行った。まあこの時点ですでおかしい。俺はリリカルな世界に行くと言った気がする。そこで俺はまあ強くなつたんじゃないかな。お陰でリリカルな世界で頑張れると思つた。でも、それは淡い夢だった。

「ふう・・・やつと着いたか? やつと、やつとのことで俺はリリカルな世界にこれぞお! これでハーレムが! (※適当に言ってます)」

最初の目標として、家の確保・戸籍確保。これが第1目標だと思う。そして、原作キャラを見つけて接触する。これも最大の目標だと思う。

まず、辺りを見回す。木・木・木、木ばかりだった。しつてるか? 森って感じは木がたくさんあるからだそうだ。そりやそうか・・・とりあえず森から出よう。

「なぜか雪が降ってるしな! 早く家を見つけなくては・・・あれ? 俺、金と戸籍ないから無理じゃね?」

やっちゃまった感が襲ってくる。もう詰みゲーだ。良く見るオリ主小説では管理局外

で金を稼ぐ・元から家がある・原作キャラとのうまい具合の絡みで家に居候とかこれが普通でしょ？え？俺だけいいじめですか？戸籍ない・金ない・むしろ知り合いいない。だめだこりや。

なんだか悲しくなったのでとりあえず屋根がある場所に行こうとドラクエの魔法「トペルーラ」を使い空に浮かび上がる。街がある方向へと飛ぼうと魔力を出そうとした時、今にも消えそうな魔力を感じた。

「なんだこの消えそうな魔力は・・・こつちか」

今にも消えそうな魔力がある方向へと飛ぶ。するとそこには一匹の黒ネコがいた。

「猫か・・・何故魔力を持つてるんだ？・・・ああ！リリスか！リニスなのか！これ俺、家持てるフラグじゃねえ！・・・ってそんな場合じゃねえ！魔力を上げなきゃ！よし【マホイミ】！」

魔力を回復させる呪文【マホアゲル】こんな呪文があるなんてさすがウイキペ・・・おつとさすがドラクエの世界で頑張っただけの事はあった。え？決してメタな発言はしてませんか？

「とりあえず。これでひとまずは安心か・・・？」

少し待ってみる。・・・10分後・・・20分後・・・30分後・・・って遅いわ！いつ起きるんだよ・・・寝てるってことはこれを使えるかな？【ザメハ】

【ザメハ】味方が睡眠状態の時その状態を解除させる事ができる呪文だ。これで起きなかつたら蘇生呪文の出番か……?

少し考え事をしてしているとリスが動いた。

「お?起きたかな?おーい大丈夫か?おーい!」

ひげを触りつつ話しかけてみる。前足で引つかかれた……解せぬ。

「にや……にやあ……あれ……フェイト?プレシア?ここはどこなの……」

あれ……しゃべっていいの?にやあで通せよ……とりあえず俺の存在に気付いてないという孤独から解放されるために話しかけるかな。

「おーいにやんこーしゃべってるにやんこー?生きてるか?」

「にやにやにや!にや……にやあ?」

ええいまさらですか!?無理だろ!めつちやおどおどしてるじゃないか!こんな怪しい猫を俺は知らない。

「大丈夫だって。声聞いちゃったし。むしろ俺も魔法使えるから使い魔くらい大丈夫だぞ?」

使い魔どころか魔物も大丈夫です!まあここで名前を言ったら怪しいから言わないが。先にこつちから自己紹介して、なんでこんなとこでぶつ倒れてるのか聞いてみるか。

「いや・・・そうですか。では、しゃべりますね。とりあえず助けてくださいありがとうございます。うございませう。貴方は魔導師のですか？」

「いや、魔導師ではない。どちらかというところと魔術師？まあどちらでも大した間違えではないがな。俺の名前は櫻木翔だ。お前の名前は？」

「あー！すいません・・・自己紹介がまだでしたね。私の名前はリニスです。改めまして、助けてくださってありがとうございます。ありがとうございました。櫻木翔」

ふむ、これで名前を呼んでも不自然じゃないよな？さてとりあえず経緯聞かなきゃな。

「で？リニスはなんでこんなところに寝てたんだ？さすがに猫でも風邪ひくんじやないか？」

「なっ！違います！寝てたんじやありません！プレシアに飛ばされて・・・あれ、プレシアとの魔力共有が切れてる・・・まさかプレシア！」

リリスは突然叫びさすと目にもとまらぬ速さで人間に変身した。目の前で女性のリアル変身が見れるなんて・・・ありがたや、ありがたや。と、そんなことより魔力を使おうとしてリリスの魔力が暴走して一気に空になつてる。

「おい、何焦ってんだよ。まったく・・・【マホイミ】ほれ、どうだ魔力は回復したか？」
魔力が切れて息切れしていたリリスに呪文をかける。

「魔力が回復している・・・魔力回復させる魔法なんて聞いたことがないわ・・・貴方なにも「!!伏せろ!」え?」

リリースを抱え呪文を発動する。

「くそ・・・これは魔法・・・?いや叫びに魔力を付属させてやがる。【マホステ】」

とつさに、魔法を無力化する呪文を俺とリリースにかける。とつさの判断により、ダメージはなかった。だが、周りの森はほぼ消し飛んでいる。良く見るとここは結界の中だ。抱えていたリリースを地面に下ろす。

「今のは何だったのでしょうか・・・とてつもない魔力が襲ってきたのに私達にはダメージが入っていない・・・一体?」

「リリース。ちよつと俺見てくるから待っててくれ」

リリースに語りかけ、「トベルーラ」を発動させる。後ろでリリースと一緒に行くといっているが、それどころじゃない気がして魔力反応があつた方向へ飛ぶ。少し飛ぶと人が見える。

皆浮いている。そして、海の中央には変な物がある。闇の書ですね。デジモンにしか見えない、恐竜の様な顔を持ち海からは触手がたくさん出ている。そして、身体が鉄のようなもので覆われ黒い羽が生えている。頭には女性が・・・いや、マーマンか?怖いぞなんだあれ。とまあ変なのがいる中でソレと対立するように上空には13人ほどの

人がいる。色とりどりの髪の毛だな・・・ツハ！それどころじゃない！あいつが何か見極めなきや！そう思い、近づこうとした時にそれはおきた。

「チエーンバインド！」

「ストラログバインド」

上空に浮いている2人が魔法で触手を引きちぎる。猫耳なのか犬耳か分からない男が魔法で残りを一掃する。敵の怪物の頭に生えているマーマンが叫ぶ。

赤いちびつこの持っている武器が突然大きくなる。それが怪物の障壁のようなものを砕く。それを待ってたかのようにあの伝説の魔王が魔法を撃つ。最初は衝撃波のようなもの飛び、そのあとにピンクの光線が4つ相手に飛んでいくそして、中央からデカめの1本が飛んでいき、他の4つの光線と合わさり障壁を砕こうとする。

次に、ピンクの髪の毛の人が剣をかざしている。なんと驚き剣が弓に変わったじやありませんか！撃とうとすると触手が生えてくる。それをものともせず障壁に突き刺さる。次にフェイトーさんがでかい剣で衝撃波を飛ばし、触手をきる。そして、黄金の光を障壁に叩きつける。またさっきの耳の人が触手を串刺しにする。それに追撃するように、あれは・・・はやてが魔法を唱える。上空にベルカの魔法陣が見える。それを中心とし、黒い渦が出る。そこから光の閃光が出て、怪物を突き刺す。怪物が石化していく。頭のマーマンが朽ちる。そして、最後の抵抗とばかりに触手を出す怪物。

だが、再生していく。周りの皆は後ずさるだが、黒い少年が魔法を唱える。するとどうだろう。海が凍っていくではありませんかついでに怪物も凍る。全てが凍りつき砕ける。だが怪物は死なない。すると、魔王・フェイトーはやてが必殺技に出るようだ。超必殺技つてところですか?これはやばくないですか?そう思い俺も魔法【マホステ】を発動させる。直後とてつもない衝撃に襲われる。終わった。そう思ったのは俺だけではなかっただろうだが、奴はまだ無事だ。そこで奴が現れる。

「ふん。まだ生きているのか・・・!僕の前では君なんぞ無力だ!食らえ【天地乖離す開關の星(エヌマ・エリシュ)】!」

突然現れた全身真っ黒(え?ここは金ピカじゃないの!?)の少年が背後の空間に手を突っ込み不格好な剣?のような槍?のようなものを取り出し、技を放つ。だが俺はあれを知っている。あれはギルガメッシュの宝具じゃないか!あんなのせこいZE!そんな事を無視して、全てを包み込むような衝撃が怪物を襲う。そして、海にクレーターを作り、怪物は完全消滅した。周りに皆は呆気にとられている。俺もその1人だ。

「な、なんでオリ主がもういるんだよおおおおお!」

俺の叫びは間違えではないと思う。全てが終わったと思い、少女たちは少年に近づきそして、飛びつく。俺・・・何しに来たんだよ・・・この日俺は転生に絶望してしまっ

た。そして、重要ストーリーの1つ闇の書事件は終わりを告げる。そう、地球で起こる事件は全て幕を閉じてしまった。

(俺^{ココ}で終わったわ)

この日1人の少年が絶望した顔でリニスのもとに戻ったのは内緒話である。

中学校は怖いところ

「翔。朝ですよー？早く起きないさーい」

朝、小鳥のさえずりとともに聞こえてくる女性の声。まだ上がりきっていない瞼をこじ開け、目をこする。寝ぼけていた頭がはつきりとしてくる。目の前には美女が！・・・つてリニスじゃないですか。

おはようございます。櫻木翔です。俺は現在リニスと同居なうです。1週間前のあの事件。後の闇の書事件を目撃してから早1週間。リニスの元に戻った俺は一緒に住む場所を探すことにしたが、そう簡単に行くはずはないと思ってた。だがしかし、女神は俺に微笑んでくれる。ある日の帰り道リニスと一緒に家を探してた時だ。偶然前を歩いていた女性が転びそうになったところをリニスが助ける。俺？口笛を吹きながらリニスの横顔見てたぞ？まあそこで女性を助けたんだが、助けた女性の名前が高町桃子さんだった。その時の会話がこれだ。

「あ・・・有難うございます。危うくこけてしまうところでした」

「いえいえ、こちららも目の前でこけられては罪悪感があるので気にしないでください」

「そうですか・・・もしよろしかったら、私のお店でお食事でもどうですか？助けてくれ

たお礼にどうぞ」

そう言つて、桃子さんにはこやかにほほ笑みながら返答を待っている。

「あ……すいません。私達あの……お金を持っていないんです……すみません」
律儀なりニスは頭を下げる。俺か？俺は何が起こっているのがわからない。いや、あまりにもリニスの顔がきれ……ゴホン。

「まあ……大変ですね……もしよろしければ私のお店で働いてみませんか？」

そう、ここに女神はいたのだ！もう聖母の微笑みに見えたね。ありやすごいわ。関心していると、話はどんどん進んでいく。途中、家もないことが分かり、小さいが家も貸してもらえらることになった。なんで家2個も持っているとかは詮索しないようにしている。そこで、俺が学校に通っていないことも知ると、夫の高町士朗さんも物凄く、逆に引くぐらい積極的に学校に通わせてくれるということ。俺って実は幸運EX!?!と
思つた時期もありました。

とまあ、そんな事もあり、今では家あり、仕事あり、美女あり、学校ありという充実した生活を送っているのだった。完！

「つて、おわらねえーよ!?!」

「!!、どうしたのですか翔?」

おっと、声に出っていたかこれは気をつけなくてはな。とりあえず起きることにする。

「ああ、何でもないぞリニス？後おはよーさーん」

「はい、おはようございます。朝ごはんの用意ができていたので食べて、修行でもして下さいよ？毎日サボってばかりで・・・まったく。まあいいでしょう、私は仕事に行ってきますすね」

「ああ行つてらっしゃい。気をつけていっついで」

そう行つてリニスは出かけていく。学校に通えるようになったといつてもまだ1月だ。学校なんてまだない。だから、俺は絶賛ニート・紐ライフ満喫中だ。修行と言つても魔力を放出して、また貯めて魔力値を上げたり、魔術回路をどうにか増やそうとしていただけだ。

ああ皆忘れてるかも知れないが俺無限の剣製つかえるんだぜ？どっかの踏み台君みたいな転生能力かもしれないが、まあ良いじゃないかあこがれないか？あの呪文みたいな言つて、剣をドバーンって出したいしな。あこがれじゃないか？とまあそんな気持ちで頼んだ能力だ。使う機会なんてあるのかね？この言葉を毎日繰り返し返しているが固有結界だけあって俺は疲れちゃう。毎日景色が変わるんだぜ？しかも次の日は頭と筋肉がとても痛くなる。なんでや？こんな副作用あるなんて聞いてないぜ・・・。

「さてと・・・また詠唱しますか。後はねてればいいしな」

そう言つて、詠唱をする。こんなことを続けて3カ月。入学式がやってくる。

「翔！起きないと遅刻しますよ！今日は入学式でしょ！入学式から遅刻していくなんて私は、許しませんよ！」

朝から小鳥のさえずり（ry。こんなことを言っている場合じゃない。あれから3カ月。リニスと一緒に暮らしてきたがどうにもリニスがおかんにしか見えない。そんなことより、学校か・・・今日入学式じゃないか・・・めんどくさいなー。俺はと言うとめんどくさがりな性格になってしまった。リニスのお陰で働かなくてもお金は入るし、飯はおいしいし。翠屋のデザートはおいしいし。マダオになっている俺であった。

「ん〜？もう朝かあ〜？何時だ？」

時計を見る。8：40分。もう1回見る。8：41分。あれ・・・？気のせいかな？入学式は9時10分くらいから。9時には集合。・・・もう1度時計を見る。8：42分。1分の間に俺の頭は活性化していく。

「遅刻じゃねえええええええかああああああああああ！なんでリニス早く起こさねーんだ！」

「私はちゃんと起こしましたよ！翔がいつまでたつても後5分後10分つて延ばしてい

くからでしょ！」

俺は人として、起こしてくれた人に文句を言いつつ、一瞬で布団から飛び出る。そして、一瞬で顔を洗い歯を磨く。飯なんて食ってられるか！

「いつてきますリニス！【ピオラ】」

そつこうで無駄遣いな素早さアツプ呪文【ピオラ】を唱える。素早さがアツプした！と脳内では出ているはずだ。だがそんなもの関係ない。急いでいかねば！風のような速さで駆ける。

「で、あるからにして本校では小学生のような態度で授業を受けずに・・・」

こんにちは高町なのはです！今は始業式の最中なの！今日から中学生になるから私は頑張りたいと思います。今は校長先生の話の最中です。あー早く終わらないかな・・・はやてちゃんねちやつてるし、フェイトちゃんなんかまじめに聞いてちやつてるし。あー暇なのー。

「すいませーん！おくれましたー！ギリギリセーフか!?」

!!。びっくりしたの。突然男の子が飛び込んできたの。皆その男の子にくぎ付けなの。私も驚いて後ろを振り返ってしまいました。はやてちゃんなんて椅子から転げ落ちてるの。校長先生も驚いて話止まっちゃってるし。誰なんだろあの男の子・・

やあ2度目のこんにちは。櫻木翔だよ突然だが、俺はなんかめっちゃくちや皆に見られてる。そんなことより、この空気をどうすればいいのだ・・よし、とりあえず一回出よう。そして帰ろう。出直しだ。

出ようと、扉に手をかける。

「バシユ・・・ジユウ」

え？何が起こったかって？俺の手をかけた扉の真横にチョークがめり込んで、蒸発して消えたぜ？俺は恐る恐る後ろを振り返る。投げ終わった感を出している。スーツ女性がいる。その女性はマイクを隣のおっちゃんから奪い取り、一言言う。

「櫻木翔、入学式から遅刻なんていい度胸してるじゃないか？後でたっぷり御仕置きだな。とりあえずその開いている席に座れ」

とてもきれいな美声でした。と言っている場合じゃない。さっさと席に座ろう。来

ている保護者に頭を下げながら頭の紫女子の隣に座る。

「いやーすまんね！汗臭かったら言ってくれ。なんにもできないからどうしようもないが頑張る！」

「え……いや大丈夫……ですよ？」

隣の女子はちよつと引き気味に答えてくれた。そのまま、色々な視線を受けつつ、入学式を過ごす。30分ほど経ち、やつと終わった。後ろの席からの退出だったので、足早に体育館を抜ける。そして、クラス割の書いてある紙を確認する。

「えーつと……俺は1ーCクラスか……さっさといくべ」

クラスを確認し、校内に入る。先ほどの事もあり生徒に見られる。この学校はエスカレーター式なので、俺みたいな途中から入ってくるやつは注目の的だろうな……そう思いつつ、階段を上がり辺りを見回す。

「1ーA……1ーB……お、あつたあつた。1ーCクラスはここだな」
クラスを確認して、教室のドアを開ける。

ガラガラガラ

「ういーつす」

軽い気持ちで手を上げつつ教室に入る。一瞬にして視線を独占する。もうクラスの大半が集まっているようだ。自分の席を確認するために前の黒板に貼り出されている

紙を確認する。

「えーつと、おつしやあ！一番後ろの窓側の席じゃん！もう寝てくれっていつてるようなものだな」

軽い気持ちで後ろの席に行く。そこには俺がこれからともに勉強に励んでいく机を椅子のように座っている金髪女子がいる。俺はガツンと一言言つてやろうと思ひ、メガネをクイツとする。あ、ちなみに俺の容姿だが、黒髪、黒眼のきりつとした顔のイケメンフェイスだ。だが、前髪で目を隠し、そこに伊達メガネという家で爆弾を作つていそうな格好だ。

「すまないが、そこは俺の席なんだが。俺のこれからともに勉強に励んでいく机を椅子の様に使っている無礼な金髪女子よ、どいてくれないかな？あ・・・日本語通じないかな？英語俺しやべれないんだよな・・・えーつと、んーThe desk is mane (その机は俺のだ)？It can move aside quickly (さっさとどけ)？」

これで通じたと思ひ金髪女子を見る。下を向いてフルフル震えている。あれ？なんだこれ泣かせてしまったか!? そうドキドキしながら金髪女子を見守る。金髪女子が顔を上げる。なんて美形だ。見とれていると、視界が真っ暗になる。あれ？何が起こつてんの？頭をクリアにさせる。すると、顔に痛みが走る。

「いつてええええええええええ！めちやくちやいつてええええええええ！」

そう、俺は何故か金髪女子に殴られた。え？なんで？俺なんで殴られてんの？怖い！
中学校こわい！

「あんたねえ・・・誰に命令してんのよ！普通に言えばいいじゃない！後、私は英語使われなくてもあんたの言ってることなんて分かるのよ！」

「ま、まあアリサちゃん・・・いきなり殴ったらだめだよ・・・ね、ねえ大丈夫？」

俺は誰にも気づつかれないように顔に「ホイミ」をかける。痛みが引いた。ここからが俺のターンだ！俺は声をかけてくれてる紫の女神を手で大丈夫だと合図を送り、少し避けてもらう。

「痛いんじゃないけえええええ！なんで初対面の女子に殴られなきゃいけないーんだよ！金髪ってことはなんだあれか！反抗期ですか？反抗期ですよ！て言うか不良じゃん！金髪の不良少女じゃん！こわいわ！中学生の反抗期不良こわいわ！」

「な、誰が反抗期の不良よ！良いじゃないやつてやろうじゃない！かかって来なさいよ！ぼっこぼこにしてやるわ！」

そう言い、お互いに距離をとりフラインティングポーズをとる。ここが俺の正念場だ！覚悟しろ金髪女子よ！俺は一気に詰めて殴ろうとした。男としてどうかなんて事じゃない！俺のプライド問題だ！向こうも一瞬の内に距離を詰めてくる。なんてやつ

だ！お互いの拳がぶつかると寸前俺だけが吹っ飛ぶ。え？なんで？何が起きた？先ほどの痛みの倍の痛みが襲ってきた。

「あんた達馬鹿してんじやないよ……まったく。バニングスもあなたらしくないわよ？」
「すいません先生。気をつけます」

そう言つて金髪女子は去つていく。俺をにらみつけながら。痛みを直しようと「ホイミ」をかける。あまり痛みが引かない。なんてやつだあいつ！

「あんたもいつまでも寝てないでさつさと起きて席につきな。HRができないだろ。ほらさつさと立て」

なんてこわい先生だ。俺は素直に席に着く。その間、隣の席の紫の女神さまが、アリスちゃんのことごめんね？と謝つてきてくれた。とてもいい子だと思いました。まる
「じゃあHR始めるわよ」

こうして俺の中学生生活が始まるのであった。

学校始まって1日で体力測定ってどんな学校だよ

学校初日が終わった。だが、学校とは毎日あるものだ。俺はそのために睡魔という魔王にも匹敵する奴に逆らわなくてはならない。今も絶賛格闘中だ。

「起きろー！起きるんだ俺！今すぐ起きてきかえるんだー！」

「翔……布団に包まってもう俺は起きない！ってな格好でそんな事言っても時間は過ぎていきますよ……」

呆れるリニスを横目……いや布団に包まってるから見えないが呆れているだろう。少し眠気が去ったので時計を見る。まだ7時だ。全然早かった。

そこからまずきがえる。そして顔を洗い、飯を食べ歯を磨き、ニュースをちらつと見て家をでる。

「じゃありニスいつてきまつくす」

「はい、行ってらっしゃい。気をつけて行くんですよ？」

笑顔で手を振ってくれるリニスに言葉をかけ家をでる。俺の通っている学校はなんとバスがあるんだとか。今日からそれに乗ってみようと思いい、バス停に向かう。趣味の読書（笑）をしながらバス停に歩く。少し歩きバス停が見えた。

ふと、視線をバス停に向ける。金髪不良アサリ・バーニングと紫の女神月村すずか様がいらっしゃる。

(よし、月村様にはあいさつをかわそう。だが、あの金髪不良には無視だ！)

固い意志を抱きつつ、バス停に足を進める。バス停が目の前に来た時月村様がこちらに気づいたように手を振ってあいさつをしてくださった。ありがたやありがたや。

「おはよう。櫻木君」

「おはようございます。女神月村様。本日も御日柄がよく「ちよつと待ちなさいよ」：「なんで無視するわけ？喧嘩うってんの？」

「できましたよ金髪不良特有の絡み。あーこわい。一般市民の俺は不良なんてこわくて仕方がない。」

「さ、櫻木君・・・あいさつしなきゃだめだよ？」

笑顔に女神様に言われてしまったら仕方がないよね？よし、覚悟を決めてあいさつしてやるか。

「はよーさん」

「ふんっ！」

「あべし！」

ええ。御察しの通り殴られましたよ。思いつきり腹を殴られましたよ。ちよつとみ

ぞはいって息がやばいです。

「ア、・アリサちゃん！なにしてるの!?!なんで殴ったの!」

おお聖母マリアいや聖母すずかよ、なんていいやつなんだ。俺に駆け寄ってきて背中をさすつてくれている。

「え？そいつのあいさつが気に入らなかつただけよ？大丈夫そいつ以外にそんなことしないから」

なんですかそのツンデレいらさないよそんなの。そんな思い愛はいらない！そんなことしている間にバスが来る。それに乗る。聖母すずかさんと金髪不良バーニングはシヨートカットの茶髪色の少し色が抜けたような髪の色のはやと一緒の後ろの5人席で仲良く会話している。俺は1人で席につき、読書を開始する。すると、バスが発車する直後におかれてくる子がいた。茶色のツイントールを振りながら、金髪赤目君と仲良くかけてくる。

「ま、まってなのー!」

「急げなのは！遅刻したくないだろ!」

飛び乗ってきたのは、りりかるなのはさんと、匿名さんだ。誰かに似てるな…誰だろ？

「ふうーギリギリセーフだななのは」

「危なかつたね！王君！」

王……ああギルガメッシュに似てるんだな。へー……つて転生者じゃねーですか！ああ、そう言えばこの世界に来た時になんかいたな。エヌマさん撃つてたし、まんまやんけ。とまあ、関わることないだろうしいか。なんか王君！にめちやくちや睨まれてたけどバーニングめ！変なこと言つたんじゃないのか？

「如月君おはよう」

「ああ王おはよう」

「王君おはようさーん」

モテモテですねー。なんですか絶賛ハーレムなうですか。皆、如月王君に惚の字ですか？はゼロリアル！はぜた後に俺の元に集まれ！……かなしくなつた。まあ俺は黙つてバカテスの小説でも呼んでればいいか。いやーおもしろいよね。おれもムツツリー二になろう。……無謀すぎるな。

一人でムツツリー二になるか考えている間に学校に着く。そこから教室に向かう。小説？もうカバンの奥底に埋まつてるよ。小説読むならアニメ見るし。字が多いのは苦手なんです。学校指定の靴から、上履きに履き替える。そして、教室に向かい自分の教室のドアを開け席に着く。生徒は大分集まつている。カバンを机に掛け準備は整つた。

「よし、寝よう」

腕を交差させ、机にうつぶせになる。少し眠り、本格的に寝ようとした時に奴はやつてくる。

「おはよー、今からHR始めるわよ」

眠気に負けそうになった意識を復活させ、先生の言葉に耳を傾ける。

「じゃあ、1時間目は体力測定だからみんな体操服に着替えておけよ」

え？なんて？入学してまだあんまりどころか1日しかたつてないのに、いきなり体力測定だつて!?なんちゅー学校や・・・まあ安心できたことが俺の置き勉（通称：勉強道具を学校において帰る事）をしている俺に不可能はない！体操服を取りにロッカーに向かい、教室に戻る。

「「「きやー!」」」

え？何があつたつて？もう女子が着替えてましたよ？ええ見えました。仕方がないじゃん。見えたものはどうしようもないんです。

「誰がお前らみたいな幼い身体に——あべしっ!」

意識をかりとられるような痛みが腹部を襲う。まさか・・・奴か！痛みにくらえ目を開け、扉に向ける。いた。腕を組み俺を見下している。

「あんたいい度胸してるわね。女子が着替えている事を知っておきながら教室に入つて

女子の身体を視姦した。しかも、お前らみたいな幼い身体に興味がないですって？ やつてやろうじゃない？」

指をポキツポキツとならせながら迫ってくる阿修羅がいる。だが、馬鹿なのはお前だ！金髪不良バーニング！

「つふつふつふ」

「な、何笑つてるのよ！ 気持ち悪いのよ！」

「金髪不良バーニングお前はまだ気がつかないのか？」

「な、なにがよー！」

金髪不良バーニングは少し後ずさりながら聞いてくる。おや？ 聖母すずか様も気がついたようだ。

「ア、・アリサちゃん！ 服着て服！」

そう言うことだ。金髪不良バーニングは、上半身が下着だけなのだ！

「しかと見せてもらつた！ その赤の下g——ブホツ」

「こ、この変態があああああああ！」

アッパーが飛んできました。だが、俺の意識はきれない。金髪不良バーニングは顔を真っ赤にしながら教室に引き返した。聖母すずか様にもちよつと見下された気がするが、俺は勝つたんだ！ 俺は一人ガッツポーズを決め、男子生徒が着替えているのである

う教室に向かい着替え、体育館に向かう。

体育館では、校長先生が恒例の長い話をしている間にも顔を真つ赤にした金髪不良バーニングがこちらを睨んでいるが、俺が目を合わせると慌てて目をそらすという、なんともまあかわいらしい姿が見える。そんな事を数回繰り返している間に校長の話が終わり体力測定が始まる。まず男子と女子とわかれ、次にクラス別になる。1年生はクラスが4クラス。A、B、C、D。原作を良く知らないが原作組がAクラス 俺 金髪不良バーニング 聖母すずか様。Bクラス 如月王 高町なのは。Cクラス はやて フェイト・テストタなんちゃら。Dクラス …あれ？フェイト似がもう一人えーと…アリシアだっけ？なんで生きてんの？まあいいか。転生者いる時点でそんな事も起きるさ。

まず、Aクラス・Bクラス。Cクラス・Dクラスとわかれ、測定が開始される。男子は体育館から。女子は外から。A、Bクラスはまず握力測定から。ハードだよね…？1人、また1人と終わっていき、俺の出番が回ってきた。

「次は…・・・櫻木翔君どうぞー」

体育の先生だろうか。名前を呼ばれ前にでて握力測定機を持つ。これがまた恥ずかしい。みんなに見られている。みんなと言ってもまだ終わってないクラスメイトに見られるだけが、中学1年生の平均握力っていくつだっけ？とりあえず普通に力を込め

る。

「ええーつと・・・78・・・？すごいわね・・・。つ、次は左ね」

若干ひきつっている体育の先生の言葉を聞き、握力測定機を左手に持ち、力を込める。
「80・・・す、すごいわね・・・」

ふと思った。前世でもこんなにも出したらすごいことになるじゃん・・・忘れてた。
と、落ち込みつつ、クラスメイトにお前すごいな！と声をかけられつつ次の測定場に向かおうとした時に後ろで歓声が起こる。如月王君が握力100超えたそう。やりすぎだろ・・・

そんな事もありつつ体育館内の測定が終わり外にでる。男子の目は女子にくぎ付けだ。何故かって、そりゃあ中学生離れた身体してる女子が何名もいて、走ってるから揺れる物もあるわけじゃないですか？それ目的でしょうね。俺？俺は既に面倒くさい状態です。学校の運動場に隣接した位置のちよつとした土手のような芝が生えてる場所です。学校の運動場に隣接した位置のちよつとした土手のような芝が生えてる場所で見とれていたおかげで大分おくれるようだが、先生も前かがみになりながら仕方がないと言っている・・・中学生に欲情するんじゃないやありません！いい大人がだらしない・・・。そう思いつつ、芝に寝転がりっぱなしで太陽を浴びている。

少し時間が経ち、俺の出番が来そうなので運動場の100m走があつてるところに行

く。Bクラスの生徒と走るそうで俺の相手は……野球部か。輝く頭がまぶしいです。はい。なぜかやる気満々の野球少年。なにかちらちらと土手の方を見ている。俺も見てみると、女子がもう終わったようで、男子生徒を見ている。ああ意識してるんだ。この思春期少年め!

そんな考えをしている間に走る時が来たので、クラウチングスタートの格好をし、合図が出るのをまつ。

「よし、いいか?位置に着いて、よいい……どん!」

ピストルとの合図で駆けだす!予定でした。野球少年は走り去る。俺か?地面とキスしてます。俺の初キツスが……いやそんなことより恥ずかしいな。メガネ割れてないだろうか?

「おいおい、大丈夫か?」

先生が声をかけてくれる。軽くホイミをかけながら立ち上がる。

「ええ、大丈夫です。すいません……」

恥ずかしさを我慢しながら立ち上がる。土手の上で金髪不良バーニングが大笑いしている。くそ……!

「んーもう1回走ってもらおうか。だれか走ってくれるBクラスの生徒はいたかな……お、ちようどいい。おい如月、お前もう1回走れ!」

「え？僕ですか？いいですが……まああいつらにかっこいいところ見せれるしいいかな」
おい、周りに聞こえないように言ってるようだけど、聞こえてるから。そんな事を言っている間に仕切り直し。

「次はこけるなよ？位置に着いてよーい……どん！」

よし、次は行ける！そう思ったころもありました。王君早すぎでしょ？どん、と同時にほぼゴールしてます。え？あいつ魔力で強化してんだろ……地球で魔法つかつていいの？さすがの先生も唾然としている。必死に今のは錯覚だといっている。

「ちよ、ちよつと先生目がおかしくなったのかな？ま、まあいいか」

俺のタイムは1秒台という普通より少し早いくらいのタイムだった。ああ、なんて面倒くさい体力測定だったんだ。

そこから授業は午後までだったので、走って帰って速攻眠りに着いた。かえってきたリニスが見たのは寝言で魔力強化なんて反則だろ。と言っている俺をみて恐怖したそうなの。
うな。

あー死亡フラグだなー

ああまたこの時がやってきた。もうこの時間が来ないことを祈って何年経つただろう。いくらこの時が来ないことを祈っても来てしまうのがこの定め。

なんの時間だつて？ 決まってるんだろ学生ならだれしも経験した事のある面倒な時間。

「翔。寝言かなにかしりませんけど、いくら朝起きたくないからってそんなこと言ってもだめですよ？」

ええそうですよ。朝起きたくないだけですよーだ。だつてよ？ この温かい布団から出てわざわざ歩くという重労働を行ってまで学校と言う生徒を監獄する場所までいくんですよ？ そりやおきたくないですよ。

「翔・・・起きないと言うなら・・・」

「は、はい！ ああーいい天気だなーこんな日は早く起きて学校にイキタイナー！」

何故だろう。最近リニスが必殺技を覚えたようだ。フライパンを構えて阿修羅のような顔で俺を見てくるんだ。とても怖い。さて、既に学校に行かなくてはいけない時間なのでさっさと家を出ることにする。

「じゃあいつてきまーっす」

「はい、いつてらっしやい」

夫婦のような会話をしつつ家を出る。いつも通りバスに乗り込み、原作組＋転生者がいつも通りイチヤイチャしつつ乗っていた。

（あれ？バーニングとすずかさんがいない。遅刻かな？車かな？原作組も不思議に思っているようだがまあいいだろう）

疑問に思いつつも学校に行く。教室にはいる。席に着く。眠る。これが俺の最近に動きだ。HRが始まるまで眠る。先生が来る。そこで驚くことを聞く。

「あー昨日からバーニングスと月村が家に帰ってないそうさ。誰か知らないか？」

あー誘拐フラグですか？普通小学校の時間におきてるはずなのになー。でも俺捜索魔法とか持ってたかな？んー「バルプンテ」を使ってみるか？でもなー失敗したら大変な事になりそうなんだけどな。そこまでのことは・・・起きないよね？大丈夫ちゃんと作者が考えていいこと起こしてくれるはず。

（ちよつと・・・メタ発言厳禁ですよ！まあ、努力してみましよう。）

よし、作者が決意してくれた。さてやってみるか。とりあえず教室から出ないとな。「せんせーいおながが痛いのでトイレにいつてきてい「だめだ」え？」

は、早い！なんで!?!なんでこんなに早く拒否するの!?!え・・・どうしよなんにか便利な魔法あったかな・・・あつたぜ！食らえ！

ボソツと小さな声で呪文を使う。

「レムオル」

「レムオル」移動呪文。自分たちの姿が透明になり、他の人から見えなくなる。これで大丈夫。こっそりと先生とクラスメートに「マヌーサ」も掛けておく。

「マヌーサ」は相手に掛ける事で幻術を見せることができたはず！な呪文。

(とりあえずこれでいいかな？よし、屋上に行こう)

教室からでてBクラスのの前を通りかかったときにBクラスから叫び声が聞こえる。

「俺がアリサとすずかを助けるんだ！離せ！今からあいつらをたすけるんだあああああああああー！」

ああ、そりや心配になるわな。まあまかせとけオリ主人公。どうにか頑張ってお前の手柄にしてやるから。と、そんな事をつぶやきながら屋上に上り「レムオル」を解く。

「さて・・・と。運良くいい結果にしてくれよ？作者さん。では言ってみましょうやりましょう。いくぜー！【パルプンテ】」

突如視界が暗くなる。だがそれも一瞬。目を開ける。場所は屋上。

「あれ？なにも起きてないな・・・作者のバカヤロー！」

文句を言ってもはじまらない。くそ・・・どうすれ・・・ば？あれ左上にマップが見えるぞ？なんかマップが拡大するぞ？なんか赤く光ってるのが2つあるぞ？はて？

まあいいか行つてみなきや始まんないしな。

えーとマップを指定して呪文を唱えましょうか。

「ルーラ！」

視界が上がる。瞬きをする。次に見えたのは街の端にある工場地帯。その1つの倉庫前に着いたようだ。さて中に入ろう。どこから入ろう。2回の窓から入ろう。さあ入ろう。「トベルーラ」を使い倉庫の2階にある窓まで飛び窓を開けようとする。あかない。そりゃ開くわけないよな。とりあえずあつてよかつた呪文。

「アバカム」

「アバカム」鍵の閉まっている扉、窓などを開ける事ができる呪文だ。とりあえずこれに入れるぞ。窓から入る。そこで俺は言葉を失う。なんと豪華な倉庫なのだろう。入ればどこかの豪邸と間違えるほどの豪華さだ。まず部屋を1つ1つ見ていく。なにもない。なんにもない。ふと次の部屋に入ろうとした時突然ビンタのような音が聞こえる。

これはまずいんじゃないのか！と思ひ扉を少し開け仲を覗く。そこでまた言葉を失う。何を見たと思う？それはな……

「なによこのまじい御茶はさつきと別のを持って来なさいよ」

悪魔がいました。ええどう見ても悪魔です。スーツの御兄さんに御茶をぶっかけ別

の御茶を要求している金髪不良バーニング。それとは別にスーツ青年を椅子のように座っている聖母すず・・か様だ。だが目がこわい。なんていうか目に白い場所がない。黒一色だ。あれえー？なんかこわい。あれ誘拐されたんじゃないの？どう見ても奴隷じゃん！どつちがつて、スーツ青年がに決まってるでしょ。んー勘違いかな？なんでこんな状況なんだろう。少し見ても問題ないようなので帰ろうとすると下の階から爆発音が聞こえる。あれえーこれまさかあいつ来たんじゃないの？俺ばれたらやばいじゃん！よし、あれ使おう。

「モシヤス」

「モシヤス」唱えると変身できる。なんとも頼りになる呪文だ。とりあえず中の青年に変身する。そして、中から出てきた変身した青年を気絶させて隠す。部屋の中に入り、侵入者だ！と叫び中のやからを1階に行かせる。部屋にいる金髪不良バーニングと聖母(?)すずかに話しかけようとすると、また爆発音が聞こえた。突然部屋の床が抜ける。下に落下する。落下する。すぐに2人は1人の男に抱きかかえられその場を脱出する。あれ？俺は？そのまま落下し、しりもちをつく。痛みをこらえながら目を開ける。すぐ閉じた。

やつがすごい剣幕でこつち見ている。やべえぞこれおれ殺されるんじゃない？よし、死んだふりだ。俺はそう決心して、死んだふりを決め込む。だが突然腹部に痛みが走る。

「ゴフオツ！」

肺の中の空気が一気に持つて行かれた。痛みにこらえ目を開ける。目の前には俺を
つけたであろうやつがいた。

「貴様がアリサとすずかを誘拐したやつか！ゆるさん！この僕はゆるさないぞ！」

あー俺の死亡フラグがピンピンですね。あー終わったわ。これ俺も本気出して戦闘
していいの？いや駄目だよね？てかこいつに勝てる気しないもん。王の財宝あるんだ
よな・・・宝具一斉放射とか勝てる気しない。おれどうしょ・・・

やつと僕のターンですか・・・

やあ、俺はここリリカルなのは世界のもう1人(?)の主人公。如月王だ。俺が最初に気がついたのは白くなにもない真っ白な世界だった。そこに1人の神がいた。自称だがな。そこで俺は死んだことを告げられた。あまりシヨックではなかった。前世では友達もいずに、部屋に引き籠っていた。親にも見捨てられていたしあまりいい前世ではなかった。

だが、これは好都合だと思い、神に話を聞いてみる。神のミスで死んでしまったらしい。だが転生させてくれるそうだ。とりあえず好きな願いを3つかなえてくれると言うらしい。だから俺は3つ願う。

1つ、ゲートオブバビロン 2つ、ゲート・オブ・バビロン——王の財宝の中身を全てとそれを扱える技量 3つ、俺専用のデバイス(超高性能)の3つを頼んでみた。神はなんの迷いもなく承諾してくれた。だが、まだ俺の転生する世界を聞いていなかった。そこはどのようなよと神に聞くとリリカルなのは世界だそうだ。これは俺のハイレムフラグだと思った。少しして地面に穴が開き落ちていく。

次に目が覚めた時俺は公園にいた。

「王ー帰るわよー？早く準備しなさい」

ふと、どこからか俺を呼ぶ声が聞こえる。声のする方向を見ると金髪の女性が俺を呼んでいる。疑問に思いながら女性を見つめっていると女性が近づいてくる。

「もう・・・どうしたのかしらこの子は。そのだれ？みたいな目は・・・はあ貴方のお母さんでしょ？」

「おかあ・・・さん？」

「そうですよ？なにを疑問に思ってるのかしらないけど家に帰るわよ？」

そういつて女性・・・いやお母さんは俺の手を引きながら家に帰る。その時俺は5歳。原作が始まる4年前だ。

そこから、俺は今まで見た事のある二次小説の踏み台主人公のようにならないため口調を直すことにする。まず俺から僕に。そして、負けないように修行も欠かさない。そうしている間に原作が始まる。原作知識はあるからこまらなかつた。しかもだ、最初は危険視していた別の転生者が見当たらない。これでは宝の、いや特典の持ち腐れじやなか。まあいいか。僕はこれでも一応最強なので、困ることはない。そんな事を考えている間に出来事は過ぎていく。ジュエルシードを21個集めた。その間フェイト側に付いているかと思つた転生者もいなかった。

フェイトと何度もぶつかる間に仲も良くなつてきた。そこで時空管理局とも出会い

話は進んでいく。そして物語は無印最後の地、時の庭園。そこで僕の特典のゲート・オブ・バビロンを発動させる。迫りくる傀儡兵を全て蹴散らす。宝具の放出は最強だ……！

そうして、中に入り動力炉をなのが破壊する。僕の目の前にはフェイトの母親プレシア・テスタロッサ。そこでプレシアはフェイトを傷つける。これは原作で知っているがなかなかひどいことを言っている。だから僕はそこで全てを覆す！

「僕の宝具にはどんな傷でも治す杖——力と知恵はただ杖に宿る(カドゥケウスの杖)——と——生と死は作り出せるもの(創生・壊死のクリエイティム)——だ。この2つがあればアリアシもプレシアも無事だよな？まかせてよ。僕に不可能はないから」

若干ひきつりながらも納得してくれる親子に僕は微笑みながら宝具を発動させる。アリアシアは生き返りプレシアの病気は消える。2人が驚いている所で僕はリンディとクロノにレアスキルか!と聞かれるが何とかごまかしながらもそう頷く。

そこからは早いものだった。プレシアが管理局に手を貸すことにより刑も軽くなりまた家族そろって暮らせるそうだ。だが心残りもある。そうリニスがいなのだ。プレシアに聞いてももうどこに行ったかわからないということだ。生き返らしたいが死体がないので無理だ。そこはフェイト達に納得してもらった。

時が過ぎ、闇の書事件が始まる。そこで僕ははやて側に付くことにする。何故か？それはハーレムが作れる可能性が高いからだ。まず図書館に通うことにした。A'sでの主人公八神はやてと会うためだ。本はあまり好きではないので図書館と言う場所はないが苦手な場所だったが出会うためには仕方がない。何日か通っていると車いすに乗った八神はやてに出会った。届かない位置の本を取ろうとしていたので僕は親切に本を取ってあげることになった。

「これかな？困ってるなら僕に頼りなよ！」

これはフラグが立っただろうと思いきや笑顔百パーセントではやてを見る。

「え……えーつと……その隣の本……です」

めちやくちや引きつった顔でこっちを見ている。やばい！しくじった！だが、ここでひるんではだめだ。僕は笑顔を向けたままはやての取ってほしがっていた本を取る。それを渡し、遠慮しているはやての車いすを押し家にする。嫌がっていた様に見えたが

この完璧な僕に失敗はないよね？そこから毎日会うようになった。と、言っても僕がはやての家に行つて遊んだり図書館に行つたりするだけだ。

そして6月3日。はやての誕生日前日だ。その日はなのはの親が経営している翠屋で買ったケーキを持ち家に行く。次の日は誕生日で忙しいだろうから前日に家に行く。そこにはさすががいたがあまり気にしない。ケーキを3人で分け遊ぶ。若干ひきつっていたと思うのは俺の思い違いだろう。そのまま時間が過ぎていき、すずかははやての家に泊まるそうだ。さすがに僕は泊まるなんてことはできず、家に帰る・・・ふりをする。そのまま深夜0時になるまで外で待機する。とても寒い、ねむい。だが頑張る。

時間も経ちそろそろ日付が変わる時だと言うところではやての部屋が光る。僕はそこでとつさにデバイスを起動させる。そうそうデバイスの紹介がまだだったね。デバイスの種類はインテリジェントデバイス。名称はセイバーだ。なんと神特権？でなんとなんと擬人化もできる。擬人化した姿は Fate / stay night のセイバーだ。

「セイバー！set up！」

「はい・・・マスター・・・set up」

どうしたんだろうセイバーは？元気がないな・・・前からこの調子だけどおなかでも減ってるのだろうか？

(なんでこんなに変態的な行動をしているのでしょうか……女性の家の前に何時間も居座るなんて……私には考えられません……しかも容姿が私の苦手な奴なのがまた……まあ我慢しましょう)

ただ、嫌いなだけだとは思っていない如月王でした。

そのまま、セットアップし金ピカ鎧を身に包み部屋に飛び込む。そこにははやて、すずかを囲むように片膝をついている闇の書の守護騎士達がいた。だが突然の乱入者に驚き窓を見る。そこには金ピカの魔導師がいる。

「なっ！シグナム！魔導師だ！」

「なんだと！ザフィーラ！シヤマル！ヴィータ！主を守れ！ここは私が！」

部屋に飛び込もうとした瞬間にシグナムが飛んでくる。とっさにシヤマルの張った結界のお陰で家は壊れても大丈夫とセイバーが言っている。なので少々僕は本気を出そうと思う。

「僕に勝てるでも思っているのか？かかってこい！」

「ふん！その自信はいつまで続くかな……っ！」

そう言つてシグナムはセットアップして迫ってくる。すぐさまゲート・オブ・バピロンを発動させ背後から下級宝具を放出させる。だが、さすがが烈火の将 剣の騎士シグナムト言ったところか。軽やかに宝具の隙間を掻い潜って近寄ってくる。さすがにピン

チと感じーつの武器・・・宝具を出す。

「貴方にはこの宝具で勝負してあげましょう」

「宝具？なんだそれは！奇妙なレアスキルを使いよつて！だが私にはきかん！」

僕は背後の空間の歪みから宝具を一つ取りだす。

「これが宝具だ。見るがいい！——七海統べる三叉鉾——！」

僕が取りだした武器はランクA宝具。海の支配者、ポセイドンが持つという武器だ。主に海の力・・・水系統の技が使える。多分！武器の槍を出した瞬間結界内の様子が変わる。空は雷が鳴り始め、雨が降りだす。

「な、なんだこのすさまじい力は・・・！それが宝具という奴か！」

シグナムは焦っているようだが、どこか喜んでいる様子にも見える。やはり噂は本当のようだ。バトルジャンキーだな・・・。僕は槍を1回転させ、背中に構えシグナムを挑発する。シグナムは挑発に乗ってくれたようで迫ってくる。

「受けてみるがいい！レヴァンティンカードリッジ！」

カシヤンと葉莢が数回落ち、剣が火に包まれる。そして激しく斬りかかってくる。僕はそれを槍で軽快に受け流し次々飛んでくる攻撃をはじく。

「どうした？やはり槍には剣で距離を詰めて闘うものだ・・・なつ！」

シグナムは勝ち誇ったように次々と乱舞を放ってくる。だが、僕には余裕がある。剣

に對しての対処法はセイバーでよく學んでいる。すぐさまシグナムの劍を大きめにはじき返す。そこからみだれづきを繰り出す。その数、数十回。だがシグナムもあまり驚く事のないように難なくかわす。そして炎でまた斬りかかってくる。だが劍を振りかぶったのが運の尽きだな。

「・・・ツフ」

「何を笑っている・・・！」

突然シグナムを雷が襲う。そう、宝具の力で天候は雨ときどき雷。そして僕の宝具の力で水を出し炎をかき消す。シグナムは驚く間もなく雷に打たれ瀕死状態だ。

「雷・・・だと！油断したな・・・」

「とどめです！真名解放【トライデント】！」

突如結界の端らへんから水が迫ってくる。そう海水だ。七海統べる三叉鉾の真名解放は海・水の力を操ると言う技だ。しかも水の威力はまさに激流。まるで弾丸のようだ。とてつもない早さで僕を避けシグナムを巻き込む。そして水はシグナムだけを包み込むように塊になる。

「ぐっ・・・！なんだこれは・・・ゴボボッ」

シグナムは苦しそうだ。よし、俺の勝ちだ！勝利を確信した時に奴はくる！

「やめろー！シグナムをはなせー！」

「まあまってよ……僕は何も争いに来たんじやないよ?」

「うそつけ!いきなり襲ってきたくせに何言つてやがる!」

この子たちは何を勘違いしているんだろう。襲ってきたのはそつちじやないか……。少し抗議しようと思った。

「いや……ヴィータ、私が考えもせずはこの者に斬りかかったんだ……」

おっと、抗議する前にシグナムが僕をかばってくれたのかな? (注:勘違いです) さすが僕の未来の嫁だ! (注:勘違いパート2です)

「まったくだよ。僕はただはやてを助けただけなのに……」

「はあ?別にお前なんかに助けてもらわなくても私達が付いてるから大丈夫だし!」

まったく……照れてるのかな?まあいいや。お?窓からはやてがこちらを覗いてこちらになにか言ってるな。

「ちよ、ちよつとー!その3人くらいったんうちにはいつてくれへんかな?」

なんと!こんな深夜の時間にお家にご招待なんて……これはフラグが立ったかな? まあいいか!さつさとはいつちやおう!そう言えばすずかもいたな……まあいいか。

そう言つて、僕は家に入る。リビング?にはすでに全員が集合している。僕を敵視しているのが4人。守護騎士達だ。すずかは状況が把握できていないのかソファの上で体育座りでおろおろしている。そして、はやては……すずかの隣に座つてこちらも

状況が分からないのか、後ろの守護騎士達を見つつ僕をちらみしている。

「とりあえず・・・貴様は誰だ？ 私達の事を知っているようだが・・・後、主を救うだど？」

「そうだ！何言ってるんだ！てめえー！今すぐぶっ飛ばしてやろうか！」

おおヴィータちゃんこわーい。まあ実力的には僕の方が強いけどね。まあ・・・これは本当のこと言っているのかな？

「あれ？知らないの？君たちの闇の書・・・正式名称、夜天の魔道書にはちよつとしたバグが発生しててね？」

まだしやべっている途中なのに、ヴィータが殴りかかってくる。僕は少し身体をずらし、その攻撃を避ける。また襲いかかって来そうだったが、シグナムに抑えられ攻撃できず僕を威嚇してくる。

「てめえー！闇の書が壊れてるって言いたいのか！」

「まあそうだね・・・そのせいではやての足に・・・いや身体に負担がかかっていくんだよっ。」

この事を聞いて守護騎士達は驚く。まあ無理もない。守護騎士達には以前の記憶がないのだ。それも全部闇の書のバグのせいなのだから。

「そ、そんなわけねーだろ！シャ、シャマル！はやての身体調べてくれ！」

「は、はい！」

そう言つてシャマルははやての身体を検査する。そして驚いたような顔でヴィータに報告する。

「確かに……主の足は私の力では治せませんでした……」

「な……っ！そんなわけねーだろ！そ、そうだ！闇の書の全666ページを魔導師のリンカーコアか魔力資質で埋めて闇の書を完成させたら治るだろ！」

「まあ君たちの記憶ではそうなってるかもしれないけどね……それが間違えなんだよ。闇の書を完成させたらその主は死ぬ。そして、星1つを滅ぼして別の世界に転生してまた新たな主を見つける。そのループなんだよ。だから僕がそれを救うためにきたんだ」

そこからは早かった。納得しないヴィータを抜き、他の守護騎士達も納得してないだろうが、何とか話を信じてもらえたようだ。そして、話が終わったと思ひ僕は帰ることにする。はやてに、え？如月君泊まるの？と言われて、しぶしぶいや帰るよと言いはやての家を後にする。次の日、僕は朝早く起き近くの百円均一の店に行き、適当にかっこいいマスクを買う。これで正体は隠せるかな……？

マスクを買った後、はやての家に行く。ふと庭を見るとシグナムが木刀を振り、トレーニングをしていた。揺れる胸……いい朝だ。そして、昨日の事情をはやてに話したところ

「うちはそんなしてもらいたくない！うちの家族になつて！これでええからー！」

なんとまあ・・・感動するお話で。最初は渋る守護騎士達だったか、はやての意思が強いことと、主と言うことで納得する。そのあと俺は守護騎士達を呼ぶ。内容は簡単。はやてはやせ我慢をしている。病気は進行している。どちらにしろ闇の書は完成させなくてはいけない事を言う。シグナム・ヴィータ・ザフィーラはシャマルを見る。シャマルは黙つてうなづく。そこから、はやてに出かけてくると言う。だがその前に守護騎士達の服、セットアップ後のバリアジャケットも考えてもらおう。そして、守護騎士達と出かける。魔導師を狩るのはだめなので、管理局外で魔力持ちのモンスターを狩ることになる。気分はまさにモンスターハンターだ！

「それにしても・・・その力なかなか反則だな」

シグナムが少しひきつった声で言ってくる。そりゃあそうだろう。宝具をいくつも放出し、攻撃する技だもんな。

そして、その途中管理局員とも会うこともあったが、さすが守護騎士と言うところか、圧勝する。そして、時は過ぎる。はやての病が早まる。焦る守護騎士達。だが僕は予想通りなので焦ることはない。ここで一つ提案する。この街には高い魔力を持った子らがいる。その一言で守護騎士達の意思は変わる。そこからは、フェイトなどと戦う。クロノと戦った時は僕の正体に気がついたようだ。そして、運命の日。僕ははやて

につらい目にあつてもらわないために、猫娘2匹を狩る事を決意する。そう思つてとりあえず病室に行く。だが、病室にははやてが眠つていた。少し寝顔でも拝もうと思ひ、近づく。すると突然衝撃が走る。なんとか後ろを振り返ると仮面の男がいた。僕はそこで気を失う。次に目が覚めた時はアースラ内の集中治療室だった。何とか目を覚ます、近くには局員がない。体内の魔力を確認すると、あまりダメージを受けていない。すぐにデバイスのセイバーを使い、転移する。

転移し、次に見た物は暴走している闇の書だった。フェイトは既に取りこまれているようでのこの場にいない。僕は怒りを覚えた。そして、背後の歪みから——約束された勝利の剣（エクスカリバー）——を取り出し、構える。剣を振りかぶる。気分はまさにセイバーそのものだ。闇の書と対立していた人達も後ろから感じる膨大な魔力に気がつき振り返る。

「如月君！」

なのはが叫ぶ！だがそんな事は聞こえない。集中する。魔力を剣へと集める。大分魔力が集まり準備が整う。

「受けてみる・・・エクス!!カリバアアアアアアアア！」

刹那、危険を感じたクロノの指示で引いていた守護騎士、なのは達は闇の書が光に包まれるのを見る。闇の書からフェイトが出てくる。そして、闇の書は最終形体を表す。

その場にいる全員の必殺技を放つ時がきた。僕も負けずにギルガメツシユの宝具——天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）を取り出し、放つ。全てが包まれ、全てが終わる。そのあと元に戻ったリインフォースが別れを言う。だが、ここで現れるのが我がオリ主人公様! どういう工程かわからないが、宝具——破戒すべき全ての符（ルールブレイカー）を使い、リインフォースとバグとのつながりを断ち切る。という、反則行為を目の当たりにし、若干引きつつも受け入れ、泣くリインフォースと守護騎士達。そしてはやて。これで全てが終わる。そして、やはり僕が最強だと改めて思う。だが：

「おのれ!おのれ!おのれ!おのれ!おのれ!おのれ!おのれ!おのれ!おのれ!おのれ!おのれ!おのれ!おのれ!おのれ!」

どうして僕がこんなに苦戦するんだ!こんなもぶと何の変わりもないはずの奴に：．．．なんで僕が苦戦しているんだ!僕こそ最強のオリ主人公のはずだ!しかもなんでこいつは無限の剣製を使えるんだ!まさか転生者!?だが．．．なぜ今頃になって．．．っは!まさか僕のハーレムを潰す刺客だと言うのか!許せん!だが勝てない!くそ!どうすればいいんだ!

「貴様!」ときが僕の前に立っている事が許されると思っているのかあああ!」

「許されるものにも．．．別にいいだろ?襲ってきたのお前出し、あー面倒だ。早く終わ

らねーかな」

迫ってくる、剣をはじきながらこの小説の主人公櫻木翔はふと思う。

（あれ、俺の出番久し振りじゃね？）

ここからは俺のターンだ！でも面倒だ！

これで勝ちだ!マ○ク!あれまだなのか!?

やあ元気してる?俺はただ今戦闘中です。なにしてるかって?前話見てみなさい。ええ、自称オリ主君に喧嘩売られています。まあ喧嘩つてレベルじゃないんですけどね。あの時は大変だった。なぜこうなったてか?こう言う事だ。

「お前がアリサ、すずかを誘拐したのか!」

地面で尻もちをつき、お尻が二つに割れてないか確認していると突然声がかかる。まあ目の前にいるとは思っていた。目線を前に戻し、少しずつ上げていく。そして目につかないはい、オリ主君ですね。分かってますって。だって、こんなことするのやつンが長かったけど。倉庫壊したんだよ?もうオリ主君ですよー。前話だと回想シ-

「え、ええーと。ち、ちがいますよー?俺がそんなことするわけじゃないじゃないですかー。

迷惑しちゃうなもう。それじゃそれで！」

片手を上げ、てを振りながら倉庫から出るため、出入り口に向かおうとする。突然背後から殺気を感じ後ろを振り返りつつ避ける。背後から爆発音が聞こえた。振り返ると・・・あれは宝具か・・・って、え？宝具？あれえー？死亡フラグがピンピンなんですけど。

「貴様・・・ふざけているのか？僕にそんな態度取つてただで済むとでも？」

やばいです。ええやばいです。やばいレベル通り越してもう目から水です。でもこれはやばいぞ。ドラクエ魔法使うところら一帯を荒れ地に変えてしまう。んー、なるべく聞いたくないんだが・・・早く逃げるためにはそうするしかないのか？

「僕を無視・・・無視するとは・・・ぶっ殺す」

直後、背後の歪みから1つの剣を取り出す。——約束された勝利の剣（エクスカリバー）——だとう・・・!?え！反則じゃないですか？あれって一応最強の宝具じゃないですか？まああれだけど、大丈夫・・・か？いや、大丈夫じゃない。あれ、やばくね？ドラクエの魔法使えない状態じゃ勝てないと思うんだが。

・・・あ、俺無限の剣製使えるやん・・・。なんか知らないけど、いつの間にか投影魔術が使えたりしてました。まあその線の才能しかなかったみたいだけど。そして、武器凶鑑などを見たりして下級武器を投影しまくりました。その

結果をここで試してみようと思う。ちよつと・・・やってみる?行つてみよう。

「これで貴様も終わりだ!僕の宝具の前ではどんな奴も立ち上がれない!食らえ!」

その瞬間から俺の詠唱は始まる。

「I am the bone of my sword. (体は剣でできている)」

「その詠唱は・・・まさか!させんぞ!」

斬りかかってくるオリ主、如月君。だが甘い!斬りかかってくるだけならこれで行けるはずだ!

「熾天覆う七つの円環(ロー・アイアス)」

俺が手を前に出し、詠唱を行うと目の前に光輝く花弁の盾が出現する。トロイア戦争にて、大英雄の一撃を唯一凌いだとされるアイアスの盾。アニメではギルガメッシュの倉庫から衛宮士郎を守るためにアーチャーが投影した盾は、最強の強度を誇る盾であった。

だが、その盾もほんの一瞬で消滅する。エクスカリバーの1撃を防いだ瞬間、盾の花弁が7枚全て消える。

(あれ・・・?斬るだけで全部散りますか?いやまだだ・・・次の詠唱に移ろう)

「Steel is my body, and fire is my bl

ood（血潮は鉄で、心は硝子）

詠唱が終わり瞬時に弓を精製し、クーフリーンの天敵とされた螺旋剣を投影する。ガラドボルクⅡ。オリジナルを衛宮士朗がアレンジしたその弓は、オリジナルに勝るとも劣らない矢ともなる。

「受けてみる！——偽・螺旋剣（ガラド・ボルク）」

直後衝撃が倉庫一帯に駆け巡る。すでにアリサとすずかは非難させてあるようなので、問題は無い。

「なに……くそ！食らうものか！——魔首掲げし青き神盾（アイギス）——」

背後の歪みから神性な光を放ちながら出現した盾はいともたやすく、ガラド・ボルクを防ぐ。・魔首掲げし青き神盾（アイギス）絶対的な防御力を誇り、真名解放で石化が解放されるといふ宝具だ。

（まさか無傷で防がれるとは思っていなかったな……すぐさま次の詠唱に移らなければ！）

「——I have created over a thousand blades.（幾たびの戦場を越えて不敗）」

「Unaware of loss.（ただ一度の敗走もなく）」

「Nora aware of gain」（ただ一度の勝利もなし）」

さすがに黙って詠唱はさせてくれないようだ。すぐ目の前にはオリ主が迫っていた。ふと思った。小規模で呪文を使うのはいいのではないのか。いまこの状況で武器を投影して斬りかかっても勝てる気がしない。投影するにはまだ速度、強度が足りない。ここは呪文の出番ですね!

「よし、これあるじゃん!」「イオ」

爆発系呪文イオ。俺とオリ主如月君との間に小規模の爆発を起こす。だが、予想以上に威力が抑えられなかったのか、倉庫1つが吹き飛ぶ。

俺たちはその衝撃で外に弾けとぶ。外に出て辺りを見回す。

(奴はどこだ・・・)

当たりを警戒しながら、空中に飛ぼうとした時背後から光の光線が迫っていた。あれはまずい。本能でそう感じすぐさま脳内会議を行う。

(どうする?ここはルーラで逃げるか?いや逃げれるが飛ぶ瞬間に消し飛ばされそうだ。じゃあどうする。あれは呪文か?ならば、呪文軽減魔法を掛けまくって対策だ。)

この間0.2秒。呪文を重複させて、エクスカリバーの威力を軽減させることに決めた。こうでもしないと消し飛ぶ自身しかない。よし、呪文軽減とダメージ軽減させるしかない!おれの全ての魔力をつぎ込んでやるZE!

「スカラ」【マホカクタ】【マホステ】【マジックバリア】極めつけはこれだ!【アストロ

ン」

これでどうだ！毎日詠唱の練習をしたかいがあった。呪文を全て唱えるまで1秒。その直後光が俺を包む。

「これで貴様も終わりだな！僕は最強なんだ！ばかが！」

「つつつつふ．．．あまいな」

ええ。俺は無敵です。無傷です。最強です。ドラクエ魔法TUEEEEEEE！一応呪文に軽く引つかかっていたみたいで、ダメージがほぼ消えていた。しかもアストロン最強すぎた。もうノーダメ。よし、オリ主如月君のターンを終わらせようと思う。残りの詠唱を一気に行う。

「With stood pain to create weapons.

(担い手はここに独り)」

「waiting for one, sarrival (剣の丘で鉄を鍛つ)」

「I have no regrets. This is the only path (ならば、我が生涯に意味は要らず)」

これで奴も終わりだ！ふはははは俺の勝利だー！(↑悪役にしか見えません)

「これでお前も終わりだ！」

「——My whole life was unlimitted blade work——この体は、無限の剣で出来ていた」

直後世界が変わる。青空だった空は曇り、倉庫の残骸が散らばっていた周辺には剣しか見えない。地平線の向こうでは歯車が回っている。ああ、初めて戦闘で使う固有結界【無限の剣製】。今から俺のターンが始まるぜ!

「お前のターンは終わりだ!ここからが俺のターンだ!」

「これは・・・固有結界・・・ふん、面白い!僕にこれだけで勝てるとも思っているのか!」

斬りかかってくる如月君を近くに刺さっていた剣で対応する。だが所詮は凶鑑などを見て作った、いや俺が作った偽宝具達だ。ランクは最低ランクにも負けず劣らないだろう。だが、数だけなら勝てるはずだ!如月君は何故か俺の剣と一緒に折れた剣を驚愕の表情でみる。そして、後ろに人間離れたステップを使い下がる。背後の歪みから宝具を放出してくる。だが俺も負けねーぞ!

俺も負けずに刺さっている剣を何本も浮かばせ操り迫りくる宝具にぶつけさせる。敵の宝具は高ランクだ!だが、こっちは数で攻めるぜ!という勢いだ。相手の宝具の数は大体10~15。それに比べ俺の宝具の数は25~30という数だ。数では負けな。い。そして、如月君もしびれを切らせたのか、不格好な武器・・・あれえやばくね?あ

れってもしかして・・・

「ゆるさんぞ！これでこの固有結界を破壊してやる！」

そう、如月君が出した武器は固有結界をアニメで破壊した有名な武器。人類最古の英雄王ギルガメッシュ様の武器。

「——天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシユ）・・・だと！」

奴が出した宝具は反則だ。俺の固有結界が破壊される。どうしよう！だが、悩むのもつかの間、何故か演説のような事を始める如月君。

「僕を馬鹿にするから悪いんだ！ぶっ飛ばす！僕を馬鹿にするから悪いんだ！ぶっ殺す！」

同じことを連呼している。だから俺は近づいて、宝具を持つている手を切り落とす。ええ容赦ないです。

悲鳴を上げ倒れる如月君。だがすぐさま立ち上がり、適当に出した様な武器で斬りかかってくる。

「おのれ！おのれ！おのれ！おのれ！おのれ！おのれ！おのれ！おのれ！おのれ！おのれ！おのれ！おのれ！」

雑な剣術で斬りかかってくるやつなんて話にならない！そして、相手の剣を弾き飛ばし剣を突き付ける。

「お前の負けだ」

最高に決まった……。そして固有結界を解除し、如月君に【ベホマ】を掛け腕を回復させる。これで俺の勝ちだ!

「その君!ストップだ!管理局外で魔法を使うのは禁止だ!無駄な抵抗をせず大人しく降伏しろ!」

まさかの、管理局フラグでしたか……。え?おれ逃げれないの?